

# 浅海定線調査

## (要約)

小野寺陽子\*・今井美代子\*\*・高坂 祐樹・工藤 敏博

### 目 的

陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報の基礎資料を得るため、昭和47年度から実施しているものである。

### 材料および方法

- 1 調査船 なつどまり(24トン、770ps、16.5ノット)
- 2 調査地点 湾内St.1~6の6定点、湾口St.A、Bの2定点、計8定点(図1)。
- 3 調査方法及び項目

調査方法は、平成19年度「資源評価調査事業」沖合海洋観測及び資源管理体制強化実施推進事業に関わる海洋観測調査指針(東北ブロック関係)(平成19年4月、独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所)に準拠した。

調査項目は以下のとおり。

#### ①海上気象

天気、雲量、気温、気圧、風向、風力、波浪

#### ②水色、透明度

#### ③水温、塩分

0m層、5m層、10m以深は10m毎の各層と底層(底上2m)

#### ④溶存酸素

St.1~6の20m層と底層及びSt.2、4の5m層

#### 4 調査回数

毎月1回(1月から12月の計12回)

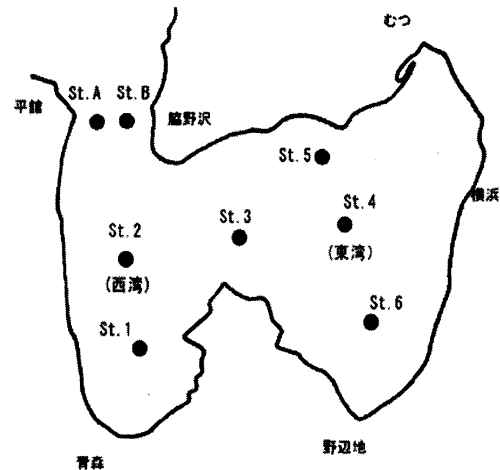


図1 調査地点

### 結 果

本調査結果からみた、平成19年における陸奥湾の海況特徴を以下に示す。

なお、平年値は昭和47年から平成18年まで観測値の平均値とし、平年との比較は、平年偏差比(平年偏差÷平年標準偏差×100)を用い、±60%未満を平年並み、±60%以上~±130%未満をやや高めまたは低め、±130%以上~±200%未満をかなり高めまたは低め、±200%以上をはなはだ高めまたは低めと表現した。

発表誌:平成19年度資源管理体制・機能強化総合対策事業 浅海定線調査結果報告書(陸奥湾)、青森県水産総合研究センター増養殖研究所、平成20年2月

\*現ふるさと食品研究センター、\*\*現むつ水産事務所

## 1 透明度

透明度の最低値はSt. 1の6月の7.0mで、最高値はSt. A、Bの9月の19.0mであった。

年間の推移は平年に比べ、1月、2月にやや低め～かなり低め、7月、10月にやや高め～かなり高め、そのほかは概ね平年並みであった。

## 2 水温

調査地点毎の水温の最低値は、0m層では湾口部のSt. A、Bが4月に、そのほかのSt. 1～6で3月に、20m層ではSt. A、Bが4月に、St. 5が2月に、そのほかのSt. 1～4、St. 6で3月に、底層ではSt. Aで4月にそのほかのSt. 1～6、Aで2～3月にみられた。

湾全体の年間最低水温は、0m層がSt. 4の3月の4.50℃、20m層がSt. 4の3月の4.31℃、底層がSt. 5の2月の4.75℃であった。

最高値は、0m層と20m層では9月に、底層ではSt. B、3、6で9月に、St. A、1、2、4、5で10月にみられた。湾全体の年間最高水温は、0m層ではSt. 6の9月の23.60℃、20m層ではSt. 4の9月の22.67℃、底層ではSt. 6の9月の20.62℃であった。

年間の推移は、平年に比べ、1月は概ね平年並み、2月～4月は平年並み～やや高め、5月はSt. 1、2で平年並み～やや高め、そのほかでは平年並み～かなり低め、6月は平年並み～やや低め、7月は平年並み～やや高め、8月は平年並み～やや低め、9月は平年並み～やや高め、10月は概ねやや高め、11月は概ねかなり低め、12月は平年並み～やや低めであった。11月がかなり低めになったのは、観測が下旬にずれ込んだためと推察された。

## 3 塩分

塩分の年間の最低値は、0m層ではSt. 1の4月の32.02、20m層ではSt. 4の5月の32.69、底層ではSt. 5の1月の32.78であった。年間の最高値は0m層ではSt. Aの12月の34.09、20m層ではSt. 1の7月の34.15、底層ではSt. Aの7月の34.29であった。

年間の推移は、平年に比べ、1月～4月はやや低め～かなり低め、5月、6月は平年並み～かなり低め、7月は平年並み～やや高め、8月はやや高め～かなり高め、9月は概ね平年並み、10～12月は平年並み～やや高めであった。

## 4 溶存酸素

溶存酸素量は、St. 3の20m層で2月、底層で1月に、St. 5の20m層と底層で2月に、このほかの調査地点、観測層では3月に年間最高となった。この後は低下傾向が続き、St. 2の底層とSt. 4の表層で8月に、このほかの調査地点では9月～10月に年間最低となった。20m層の最低値はSt. 1、6ともに9月の6.75mg/L(飽和度98%)であった。底層の最低値はSt. 3の10月に4.02mg/L(飽和度51%)が記録され、水産用水基準記載の「底生生物の生息のために最低限維持しなければならない底層の溶存酸素量4.3mg/L」を下回る値まで低下したほか、St. 2の8月にも5.91mg/L(飽和度71%)と、6mg/L未満の酸素の少ない状態がみられた。このように底層で低酸素状態が認められたものの、翌月調査時にはそれぞれ回復した。